

発表要旨
瑜伽行唯識派における病

伊 藤 瑞 康
(立正大学)

瑜伽行唯識派の学説においては、現実世界は識の顕現ないし転変によって成立する。したがって、その世界は彼らにとって、ある種の「仮の世界」であろう。ひるがえって「病」というのは、現実には生きている人々にとっての切実でリアルな苦悩である。それでは、現実の世界を「仮の世界」のように見なしかねない瑜伽行派にとっては、「病」はどのような問題となるのであろうか。また、「病」の具体的な治療など、「病」に関する詳細な考察などあるのであろうか。

本発表は、以上の素朴な疑問に端を発して、瑜伽行唯識派における「病」に関する見解を探ろうとするものである。もとより先行研究の蓄積はなく、また「現実の身体における病氣」という類いの事柄に関しては、唯識説の教理体系において積極的に関わってくる問題ではないため、まずは「病」に関する用例の分類と分析という確認作業から始めて、その上で若干の考察を加えたい。

具体的には、まず瑜伽行唯識派と関連の深いアビダルマ文献における「病」に関する用例を確認し、文意に応じて分類を試みて若干の考察を加える。その次に、瑜伽行唯識派の文献においても同様の作業をなし、両者の比較検討を通して分析考察を行う。用例調査は漢訳文献を主な対象とし、分析考察の上で重要と思われる用例については、サンスクリットならびにチベットのテキストも確認した。また、用例を分類した結果のそれぞれのグループについて、その数の割合というデータ分析については行っていない。定型句や一般的概念として「病」に言及するケース、比喩の中での「病」への言及するケースなど、思想的な意味合いをもたない用例が圧倒的に多く、それらの頻度の確認作業は「病」に関する見解の分析には必要がないためである。「病」や「病苦」に関する用例の中、定義的用例に近いものや具体的な記述など手がかりにして、何がどうなることが「病」なのか、どうなれば「回復・快癒」なのか等の考察を加えて、アビダルマ文献と瑜伽行唯識派におけるそれぞれの病の概念について若干の相違を指摘することにより、瑜伽行唯識派における「病」に関する見解についてのおおまかな見取り図を提示し、可能であれば唯識教理との関わりについても仮説を提示したい。

キーワード：瑜伽行派 病 病苦